

浄信寺通信

平成20年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

ほとけ

「仏の存在ということ」

〈いま・ここ〉なる私の身

浄信寺候補衆徒 羽塚 高照



仏教の伝統では、お釈迦さま(仏陀、釈尊などとも呼ばれます)の生涯は、「釈迦八相」と呼ばれる八つの大きな出来事を中心にとまとめられています。何と言っても、その中で、さとりをひらかれたこと、

■ 中国の6世紀の仏像

つまり「成道」が中心ですので、これを「八相成道」とも呼びます。
その八つとは、
①天下(天から白象に乗ってこの世に降下)、②託胎(白象にのって摩耶夫人の右脇か

ら胎内に入る)、③降誕(摩耶夫人の右脇から出生)、④出家、⑤降魔(菩提樹の下で悪魔を降伏する)、⑥成道、⑦転法輪(教えを説いて弟子たちを教化)、⑧入涅槃、となっています。

このお釈迦さまの伝記は、単なる歴史的な記録ではありません。仏教は、お釈迦さまの個人的な経験にはじまります。しかし、仏教の伝統は、この釈尊八〇年の生涯にすべておさまるものでは決してなく、むしろこのお釈迦さまの生涯は、その始まりに過ぎないことは、いまインドから遠く離れた、はるか後代において、いま私たちのところにも仏教が至りついているという事実からも明らかです。

八相のうちの①③は、お釈迦さまが悟りをひらくより以前のことです。また、その生涯に限らず、前世でおこなった功德について詳細に語られる場合もあります。お釈迦さまがこの世でさとりをひらかれたということは、人類

平和公園墓参のご案内

日時： 8月12日(火)
13日(水)



：午前8時頃～午後1時頃

全体にとつて、とてつもなく大きな出来事であるわけですが、これは、さとりという体験が、この世に生まれてからの努力だけではなく、どうして到達できるものではなく、前世からの善業の積み重ねがあつて、はじめてたどり着くことができる、伝記の作者は考えたのでしよう。もう一つの視点は、「衆生」

□ 京都の寺で修行する僧侶



としての「菩薩」という認識です。いまや仏となられたお釈迦さまも、かつては、自分たちと同じ苦悩にあえぐ存在（衆生）であつた。お釈迦さまの生涯というものは、仏弟子たちにとって、自分たちの未来を照らしてくれる光であり、自らの歩みをうつす鏡でもある、ということなのです。

※

お釈迦さまは、この世に釈迦族の王子、ゴータマ・シッダールタとして生まれ出ます。しかし、この世の「老病死」という、誰も逃れることのできない、何一つ自分の思い通りにすることのできない現実^{じふじつ}に苦悩し、王位を、家族を捨てて「出家」します。長い苦行生活の果てで、苦行によつては本当の安らぎを得ることはできないと知つたお釈迦さまは、ひとり静かに、後に菩提樹^{ぼだいじゆ}と呼ばれる樹の下で瞑想^{めいそう}に入り、さとりをひらかれたとされます（成道^{じやうどう}）。

お釈迦さまは、七日ごとに樹をかえつつ瞑想にとどまり、自分のさとりに知つた真理は他人には理解^{ゆかり}しがたいことを憂慮^{ゆうりょ}して、そのまま瞑想の中に留まろうとしたと伝えられます。より具体的には、もうこのまま死んでしまおう、ということだと思ひます。しかし、お釈迦さまがさとりをひらいたことを聞き知つて、インドの最高神である梵天^{ぼんてん}が、「耳のあるものはいる、さと

りに近いものはいる、どうぞ教えを説いてください」とお願いをした。それによつてお釈迦さまは、教えを説くこと（転法輪）を決意して、立ち上がるわけですから。これは、「梵天勧請^{ぼんてんかんじよう}」という名前で伝えられているエピソードです。

「成道^{じやうどう}」と「転法輪^{てんぽうりん}」の間に挟^{はさ}まる、「説法の躊躇^{ちゆうちよ}」と「梵天勧請^{ぼんてんかんじよう}」という二つの出来事は、多くのことを示唆しますが、まず何よりも重要なことは、お釈迦さまがさとりに知つた真理というものは言葉では言い表すことのできないものである。あるいは、たとえ言葉にすることができたとしても、とても難しいものである、ということなのです。「真理は言葉では言い尽くすことができない」という認識が、仏教徒にはあつた。

この出来事を伝承してきたのは、もちろん仏教徒であるわけですが、お釈迦さまが教えを説くことはあたりまえ

のはずです。特に、大乘仏教で説かれるような、衆生救済のため^{しゆじゆうきゆうさい}に修行を積むという菩薩像^{ぼさつざう}から見れば、説法を躊躇^{ちゆうちよ}するということはおかしいのかもしれませんが。しかし、悟りに達したお釈迦さまは、教えを説くことをためらつたということ、仏教の伝統は大切に伝えてきたのです。

お釈迦さまは、その困難さにも関わらず、あえて教えを説いた。ここに、師と弟子ということが成立し、そこにおいて仏教が始まつたのです。もしお釈迦さまが、悟りをひらかれても、教えを説くことをしなかったら、仏教はこの地球上に存在しなかつた。お釈迦さまが教えを説くことで、仏教はこの世に出現したのです。

すなわち、仏教には、必然的に「他者^{たしや}」というものがあるのです。仏の側から言えば、教えを説くべき相手がいる。教えを聞く側から言えば、いま迷いの生存のなかにあるこの自分に対して

教えを説いてくれる仏がいる、
ということなのです。

※

さて、その仏と仏弟子の出遭であいいという場面を考えて見ましよう。そこでは何が起こっているか？

弟子にとって、仏は、絶対的な存在です。はるか彼方かなたの存在といつてもいい。しかしそれは、完全に自分とは隔絶かくぜつした存在でも、また、ないのである。弟子にとって仏は、やがて、はるか彼方かなたであつても、やがて到達すべきものであり、自らにとつての「未来」です。弟子にとつて仏という存在は、自らがやがて歩みゆくべき未来です。逆に、仏にとつて弟子は、その逆です。いま目の前にいる、この苦悩している者は、かつて自分もそうであつた、まさに「過去」の自分なのです。このように、仏と弟子という間には、過去と未来が「入れ子」のような状態になつていて、それが、
(いま・ここ) という「現在」の

場において成立している。時間が過去から現在、そして未来へと一方向に流れているのではなく、そこでは、瞬間的にであれ、時間の循環、交流ということが起きています。

これは、何も「仏と弟子」という関係に限定されるものではないでしょう。親鸞聖人も『教行信証』に引用されています、
『安樂集』には「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪(たずね)え」とあります。教えというものは、そのようにして、人と人との関係の中で、伝えられてきたのです。遼か昔、遠く離れたインドに生まれた仏教は、その間、無数の人々によつて伝えられました。人と人とが語りえぬものを伝えてきた。そして
(いま・ここ)なる私の身にも至りついている。これは、もはや奇跡といつてもいい出来事のように私には思えてなりません。

(大谷大学非常勤講師 仏教学)

『節談説教 伝統と継承』 — スペース・サラナン 第1回布教大会 —

日時 : 2008年9月18日(木)

: 午後2時～5時30分 入場無料

場所 : 真宗大谷派名古屋別院 対面所 地下鉄名城線「東別院」下車
→ 4番出口西へ徒歩5分

講師予定 : 関山和夫・広陵兼純・祖父江佳乃・伊藤孝道・羽塚孝和

※ 広陵兼純

昭和十二年石川県生まれ昭和三十五年から昭和の名布教使のりきよぶんゆう
範浄文雄師の随行者。昭和三十九年範浄師の逝去にともない独立。以後四十五年間節談説教一筋に全国を布教。節談説教の第一人者。毎年六月十一日の布教大会には、六百名もの人々を集める。大谷派満覚寺(輪島市)住職。

※ 関山和夫

(佛教学名誉教授) 節談説教・日本の話芸研究の第一人者。

当山住職も口演します。正統な能登節の節談説教を是非一度聴聞して下さい。



□ 能登満覚寺布教大会の広陵師 2008. 6. 11

『法芸一如』？

節談説教は、芸能ではない、あくまで真宗の教えを伝えるご法義である事は言うまでもない。

しかし我が国では、古代より、宗教・生活・年中行事等は不可分の関係が確立されており、寺参りもそうした流れの中にあつた。

殊に昔は何日も続くご法座に、人々を引きつける話には、世俗的な譬喩・因縁話を抜きにしては、成り立たない。勢い説教者が、芸能性の高い、感銘深い話を勤めるように研鑽・努力し、結果的に芸人を凌駕する話芸の達人と謂われる所以もうなずけるのである。関山和夫氏は、これを『法芸一如』と提示された。

少し前までの落語には、説教から題をとった優れた噺（はなし）が多くあつたが、最近は単に笑いを取る事を目的にして話す落語家が多い気がしている。

そんな落語の中で、日本の話芸を代表する噺に『菟蓐問答』をあげる事が出来る。話芸と仏教・法芸一如等を『菟蓐問答』を通して今年の報恩講には、語ってみたいのであるお楽しみに！（住職記）

※落語
『菟蓐問答』

※登場人物：菟蓐屋六兵衛、贗坊主（八五郎）、薬王寺の権助、永平寺雲水沙弥托善。

▲旅僧は、何かを察したらしく、両手の指で輪を作り、胸の前に出した。

●これに対し六兵衛は両手で大きな輪を作った。

▲旅僧はその答えに恐れ入り、今度は両手を広げた。

●六兵衛は、片手を開いて応えた。

▲旅僧は今度は指を3本差し出した。

●すると六兵衛は人差し指で右の下まぶたを引きながら舌を出した。

▲これを見た旅僧は「私の修行不足でした。」と退散していった。

何が起こったのか皆目わからない八五郎は、旅僧を捕まえて理由を聞いた。旅僧が言うには・・・

▲どうやら和尚は「無言の行」の最中だから言葉を発しないのだろうと気づき、こちらも無言で問うと？

『大和尚、ご胸中は？』と尋ねると、
『大海の如し』と答え。さらに、
『十方世界は？』と聞くと、
『五戒で保つ』との答え。さらに、
『三尊の弥陀は？』と問うと、
『目の下にあり』と。

【永平寺 雲水の沙弥托善想い】

『お前の店の菟蓐はこんな小さいだろう』言うので、
『これくらい大きいぞ』と言ってやった。すると
『十丁でいくらだ？』と値段を聞くじゃないか。
少々高いと思ったが『五百だ』とふっかけたら、
『銭が無いから、三百にしろ』と値切ったから
『アカンベエ〜』をした、と言うのだ。

【薬王寺の和尚（＝菟蓐屋六兵衛）の想い】

報 恩 講 勤 修

平成20年11月9日（日）

午前10：00

勤行・説教・おとき

住職の法話 ほうげいいちによ 『法芸一如』

内容は？？？

聴いてのお楽しみに！

